



マサイキリンの「こなつ」：関

わいるとらいふ

Wildlife

No. 5 0

2020年11月15日

NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research Group

2020年度 アカウミガメの上陸等に関する調査結果について

2020年度アカウミガメ上陸産卵調査の集計結果は、上陸1,128、産卵770、戻り358となりました。地区別の詳細は、下表の通りです。

今年の産卵率(産卵回数/上陸回数)を見てみると、全体で68.3%という結果でした。ここ数年は、約61~69%で推移しており、全体ではやや良い結果だったと言えます。地区別に見ると、住吉海岸の産卵率が16.7%と1991年以降で2番目に低い数値となりました(最も低いのは2014年の10.2%、2016年が16.7%で今年と同値)。

近年、住吉海岸の上陸数は減少が著しく、わずかに上陸してきた個体も産卵できず戻っています。海岸浸食により産卵に適した環境がほとんどなくなってしまっていることが原因と考えられます。その他の地区は、前年と比較すると産卵率が良かった場所が多いですが、中でも運動公園とこどものくにが、運動公園：63.0%(昨年は46.2%)、こどものくに：83.6%(昨年は59.5%)と高い結果でした。比較的砂がついて産卵に適した環境があったのだと思われませんが、特別環境が良いという程ではない為、他の海岸と同様にその環境変化に注意しておく必要があります。

古中 隆裕

2020年度 アカウミガメ調査地区別調査結果

調査地区	上陸回数	産卵回数	戻り回数	産卵率	移植巣数	標識数	前年 上陸数	上陸 前年比
堀之内	74	46	28	62.2%	5	0	65	9
新富北	109	78	31	71.6%	-	-	85	24
新富南	184	143	41	77.7%	2	46	126	58
一ツ瀬南	72	41	31	56.9%	0	1	64	8
大炊田	134	84	50	62.7%	0	8	104	30
明神山	119	76	43	63.9%	1	1	88	31
住吉	6	1	5	16.7%	0	0	4	2
一ツ葉	40	26	14	65.0%	0	0	12	28
人工ビーチ	20	14	6	70.0%	0	0	6	14
大淀川	5	5	0	100.0%	0	0	5	0
空港北浜	19	14	5	73.7%	0	0	10	9
松崎	122	82	40	67.2%	0	7	63	59
運動公園	119	75	44	63.0%	0	6	39	80
こどものくに	73	61	12	83.6%	0	6	42	31
青島	4	2	2	50.0%	0	0	4	0
白浜	28	22	6	78.6%	1	0	9	19
小内海	0	0	0	-	0	0	0	0
全体	1,128	770	358	68.3%	9	75	726	402

話題を提供1

トビがシロチドリのヒナ襲う

アカウミガメの産卵調査をやっていると思われぬ出来事に遭遇します。宮崎市白浜海岸で6月29日、トビがシロチドリの巣を急襲しましたが、私たちがいたため足元が狂ってしまい、ヒナは間一髪無事でした。

カメが上陸した足跡があったので長谷勝之さんと産卵地に向かっていました。トビがいきなり、私たちの後方から2羽ぐらい先に急降下、砂浜にいたカニを狙ったとばかり思いました。

何と急襲した場所にシロチドリの巣がありました。巣と言ってもスズメやホオジロみたいなものでなく、砂地を少し払いのけ、僅かに窪んだ丸い所に貝殻を敷き詰めてあり、その中にヒナ2羽、未ふ化の卵1個、砂に埋まった卵が1個ありました。

初めて見たシロチドリのヒナはふ化したばかりか全体が黒っぽく、羽が湿ったように見えました。トビに襲われたヒナは首を伸ばして『石』にヘンション。まったく身動きしませんでした。

飛翔能力の高いトビに狙われたら逃れることはできないはず。目の前にトビが急降下したので私たちがびっくり。「ワー」と大きな声を出したのに気をとられたのか、ヒナをつかみそこねたみたいです。私たちが近くにいたおかげでヒナは無事でした。

このままでは再び狙われると浜辺に落ちていた竹などで巣を囲んであげました。「親から感謝状が届くかも」「危機一髪、ヒナを守れてよかったが」おじさんたちは、うれしくなりました。シロチドリの親はヒナが気が気でないらしく周辺を走ったり、偽傷行為をしたりしていました。

シロチドリのヒナを見るのは初めてで記録写真を撮って現場を離れました。カメの調査を終えて遠くから巣の様子を見たところ、親鳥が戻っていました。残りの1個がふ化すれば、しばらくして巣を離れるでしょう。無事、育ててくれるのを願いました。

シロチドリは全長17.5センチ。海岸の砂浜や中洲、護岸などで生息。県内でも数は少なくなっています。

上の写真はヒナが心配で近くにきた不安そうな親鳥。下の写真は石にヘンシンしたシロチドリのヒナと黒い斑点の入った卵 前田幹雄



話題を提供2

マサイキリンの赤ちゃん誕生！

今年の8月1日、待望のマサイキリンの赤ちゃんが生まれました。ご存知、キリンはアフリカ大陸の中央、東、南の乾燥地に生息する地上で最も背の高い哺乳類です。以前は、角の数や皮膚の文様、生息地から1種9~12亜種とされていましたが、その後の遺伝学的研究によって、2016年に4種と提言されています。

その中の1つにマサイキリンがあります。このマサイキリン、2019年にIUCN(国際自然保護連合)が絶滅危惧種に指定しました。2019年時点での野生のマサイキリンは35,000頭で、30年前の約半数まで減少しているそうです。ちなみに、国内のマサイキリンは1953年の札幌市円山動物園をかわきりに、多くの動物園で飼育されてきました。当園でもフェニックス自然動物園として開園する1年前の1970年から飼育を始め、これまでに65頭が誕生

しています。しかし、徐々に国内の頭数が減少し、今回の赤ちゃんが産まれる直前の国内のマサイキリンの数はオスが6頭、メスが1頭と、国内でも絶滅の危機に瀕しています。この中には、今回父親になった「トウマ」と母親になった唯一のメス「ココメ」が含まれています。当園以外の5頭は、とくしま動物園のオス1頭、鹿児島市平川動物公園のオス3頭、熊本市動植物園のオス1頭でした。

「トウマ」は、2016年1月に熊本市動植物園で生まれ、2017年11月にブリーディングローン(繁殖を目的とした動物の貸し借りのことで、動物園水族館の業界用語)で当園にやって来ました。「ココメ」は2012年6月に当園で生まれました。4歳年上の姉さん女房です。この2頭は一緒にしてすぐに仲良くなりました。「トウマ」は母親を9ヶ月齢の時に亡くしていますので、「ココメ」を母親と思ったのか、来た時から慕っていました。その後、徐々にオスに目覚め、一昨年の10月には交尾が見られました。しかし、この時は妊娠しませんでした。

さて、出産当日の様子を少しお話ししますと・・・キリンの妊娠期間は約15ヶ月で、初交尾から計算して昨年の秋から出産の準備を始めました。実際には、昨年の4月以降「ココメ」に発情が見られなかったため、この時に妊娠したようです。出産は寢室でさせるつもりでしたが、顕著な出産兆候が見られず、生まれるのはもう少し先かもと思い、出産当日もいつも通り朝一に「トウマ」と「ココメ」を展示しました。ところが、10時頃に飼育員と来園者が「ココメ」のお尻から2個の蹄が出ているのを発見し、慌てて「ココメ」を寢室に収容しました。当園でのキリンの赤ちゃんの誕生は、「ココメ」以来の8年ぶりですし、「トウマ」と「ココメ」にとっても初めての赤ちゃんでしたので、スタッフ一同ドキドキでした。



生まれ落ちた「コナツ」を気にする母親「ココメ」

多くの飼育員が固唾を飲んで出産の様子を見守る中、自分の頭にまず浮かんだのが、安産だろうか？でした。また、産まれてくる赤ちゃんは健康だろうか？ちゃんと立てるだろうか？「ココメ」は赤ちゃんの面倒をみて、ちゃんと授乳するだろうか？という不安も次々に湧いてきました。しかし、そんな心配をよそに、赤ちゃんは、蹄が見えてから2時間ほどスルッと生まれ落ちました。また、産まれた瞬間に「ココメ」が赤ちゃんを舐めて面倒を見るそぶりを見せ、その30分後に赤ちゃんが立ち上がりました。父親の「トウマ」も隣の寢室からその様子を暴れることなくじーっと見ていました。その日のうちには確認できなかった授乳も、翌朝のビデオチェックで確認し、午前中には実際の目視でも確認できました。とりあえず、ホッとしました。



「コナツ」の面倒を見る「ココメ」

赤ちゃんが産まれて間もなくもう一つ頭をよぎったのが、性別は？でした。通常、動物園では赤ちゃんが産まれてもすぐには性別が判定できません。猛獣などは、赤ちゃんが少々大きくなってから、母親とちょっと分離して、赤ちゃんを持って眼で確認します。また、シマウマなどの奇蹄類やキリンなどの偶蹄類は直接触ることができないので、オシッコの出る位置でオスメスを判定します。しかし、今回の赤ちゃんはなかなか目の前でオシッコをしてくれず、仕方なく職員が交代で時間をかけて尻尾の付け根を観察し、生後2日目でメスと判断しました。これは安産とともに嬉しかったです。なにせ、この赤ちゃんが産まれるまではマサイキリンのメスは「ココメ」のみだったからです。血縁は濃くなりますが、メスが産まれたことで、次なる繁殖が望めます。

次に悩んだのが、一般公開とシマウマやダチョウ、

父親の「トウマ」との同居展示のスケジュールです。



見合い中の「コナツ」が気になる父親「トウマ」

母親「コユメ」と赤ちゃんがちゃんと落ち着くまでは非公開のまま寢室で飼育し、その後は広い展示場でシマウマやダチョウと同居する前にしっかり見合いさせる必要があります。そこで、赤ちゃんの一般公開を8月12日と決めて、その日から母仔を寢室と寢室前にある柵で仕切られたサブパドックを自由に行き来させることにして見合いを始めました。一般公開当日は母親の「コユメ」こそサブパドックに出ましたが、赤ちゃんはまったく出ませんでしたので、キリンの寢室の2階部分にあたる観覧橋のガラス窓からの公開となりました。赤ちゃんは翌日の午後にやっとサブパドックでました。寢室では走り回っていてお転婆だと思っておりましたが、ここぞという時は慎重な姿を見せました。その日は柵越しでシマウマやダチョウと遭遇しましたが、お互いに驚くことも威嚇することはありませんでした。また、父親の「トウマ」も赤ちゃんに近づき、柵の上からのぞき込んで、やさしく顔を近づけていました。この調子で見合いが進むことを祈りました。

この一般公開と同時に愛称を募集することにしました。母親の「コユメ」も愛称を募集して決まったことやコロナ禍に明るい話題を提供するためです。愛称募集にあたっては、父親「トウマ」と母親「コユメ」の名前の由来も情報提供しました。ちなみに、「コユメ」は父親が「コブシ」、母親が「ユメ」という愛称でしたので、公募での投票数が多く、両親にちなんでいることから、この愛称が選ばれました。また、「トウマ」は、真冬の1月に産まれたことから、熊本市動植物園の担当者が真冬をひっくり返して冬真「トウマ」と名付けたそうです。8月31日まで、園内の投票箱とハガキにて愛称を募集しました。その後

園内で開票し、応募総数1,891票の中から143票とダントツで数多くご応募をいただいた「コナツ」に決めました。「コユメ」のコ、真夏に生まれたナツとしっかり両親にもちなんだことも決定の理由です。

9月に入り、9日と16日の休園日に「コユメ」と「コナツ」母仔を広い展示に出して、「トウマ」やシマウマ、ダチョウとの同居展示を試行しました。いずれも順調だったので、9月20日に戸敷市長をお招きし、母仔を広い展示場で同居展示しての命名式を挙行しました。「コナツ」に投票してくださった方の中から厳正なる抽選にて5名の方を選出し、ご本人とご家族を命名式に招待して、記念品をお渡ししました。



シマウマやダチョウと同居するキリン家族

さて、今回のキリンの誕生で驚くべきことがいくつかあります。一つは、「トウマ」に妊孕（妊娠させる）能力です。通常、キリンのオスの性成熟は5～7歳と言われていますが、「トウマ」はなんと3歳手前で初交尾し、更に3歳で種を着けました。驚くべき早熟！今回の繁殖の要因は、「トウマ」の成長・成熟が早かったことと「コユメ」との相性が良かったことだと思います。また、「コユメ」の母親ぶりにも驚きました。「コユメ」は初産ですし、他の個体の出産シーンを見ていません。母性という本能をしっかり持っていたことが非常に嬉しかったです。更に、この10月には「コユメ」に発情が回帰したことに驚きました。出産して2か月後には次の繁殖の準備ができていくことになります。動物学書や他園の情報で、キリンは授乳しながらも次の妊娠が可能だということは知っていましたが、目の当たりにしてちょっとビックリしました。

今年の9月にとくしま動物園のオスが死亡し、現

在の国内のマサイキリンの数は、オス5頭、メス2頭です。所説ありますが、キリンの寿命はおおよそ25年と言われています。国内のマサイキリンを絶滅の危機から救うには、今後も「コユメ」が順調に赤ちゃんを産むこと、また、いずれ嫁に出すことになる「コナツ」が新たな動物園で母親になって赤ちゃんを産むことが必要です。これらの繁殖に期待しつつ、可能なら新たな血統を海外から導入し、マサイキリンの命を紡いでいきたいと思ひます。

竹田正人

話題を提供3

鏡洲の鳥と動物観察記 4

2020年の干支は、ネズミです。自宅の庭と隣接する杉林に設置した自動撮影カメラには、ネズミがよく写っています。

写真1は、庭にある水を入れた鉢で飲水するアカネズミです。アカネズミは頭胴長120~135mmで、尾長は頭胴長とほぼ同じです。跳躍力がとても強くピョンピョン飛び跳ねて移動します。ネズミは水が嫌いなはずですが、なぜか鉢に入れた水に飛び込みます。2019年5月には、鉢に飛び込んで垂直に飛び上がり(写真2矢印)、また水に落下しました。左の大鉢よりもかなり高く飛び上がっています。すごい跳躍力です。鉢に飛び乗ろうとして失敗したのか、あるいは遊びだったのでしょうか。2020年4月には逆に背の高い鉢から下の水の入った鉢に飛び込みました。

杉林では、ヒメネズミが木をスルスルと登り降りし、枝を走り回っています。写真3は、杉の木に巻きついた蔓を登るヒメネズミです(2020年8月)。頭胴長72~99mmで尾が長く物に巻きつくのが特徴です。同じ頃、杉の根元を大きなクマネズミ(頭胴長150~175mm; 写真4)が飛び跳ねて移動して行きました。

今年8月に、庭にあるススキの株にカヤネズミの巣が作られているのを発見しました(写真5)。頭胴長54~69mmで、日本で最も小さいネズミです。早速自動撮影カメラを設置しましたが、今までのところ姿は写っていません。駐車場に隣接した場所な

ので、車の音に驚いて放棄したのかもしれませんが。

ネズミを捕食する動物たちもやってきます。杉林ではテンが木登りし(写真6)、ニホンイタチ(写真7)が疾走し、フクロウが林床で何かを捕らえています。写真8は、2019年8月に庭のフェンスにきたフクロウです。足にネズミを捕捉していました。

次はどんな動物たちの姿をカメラがとらえてくれるでしょうか。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8

参考図書：リス・ネズミハンドブック. 飯島正広・土屋公幸著. 文一総合出版.

長谷川信美

宮崎市で上陸・産卵した アオウミガメを確認

2019年6月23日の調査中、22時半頃に普段より大きなウミガメに遭遇しました。その日は1人で海岸を巡回中で、日曜日の夜だったこともあり早く調査を終えて帰宅して次の日の仕事に備えようと思っていた矢先のことでした。

海岸を歩いていた私は砂浜上にいる黒くて大きなかたまりを確認。すぐにアカウミガメが上陸産卵中だと判断しました。背負子やノギスなどの調査道具を離れた場所に置いて、そっと後ろの方から近づきます。カメを刺激しないようにそっと近づき、穴掘り中なのか、産卵中なのか、産卵状況を確認します。弱い懐中電灯の明かりを尻尾の方から照らしていくと、少し黒っぽい大きな甲羅が見えてきました。

「今日はえらく大きなカメだなあ…。」

これが最初の感想です。産卵し始めるのを待って、前肢、後肢に標識が装着されていないか確認し、頭の方に明かりを向けてみました。

「???'」

なんかいつも見ている頭でっかちのアカウミガメとは違う。

「ひょっとして、これは…。」

ちょっと興奮してきている自分の頭を冷静に保ちながら、アカウミガメとアオウミガメの違いを思い出します。

- アオはアカより頭が小さい→明らかにいつも見ているアカウミガメよりも頭が小さい。
- 肋甲板がアカ5枚、アオ4枚→4枚しかない。何回か数えたけど確かに4枚。
- 頭部の前額板がアカは4~5枚、アオは2枚→砂をかぶっていて頭が見えない（後ほど2枚と確認）。
- 足跡が違う→懐中電灯の明かりでは見えにくい両方が揃っておりアオウミガメっぽい。



(上記写真左が今回のアオウミガメの足跡)

これはアオウミガメに間違いないと確信し、別の場所にいた中村さんに電話を入れました。そして駆けつけた中村さんと2人で見て、すぐにアオウミガメに間違いなしとの判断に至りました。

産卵が終わったのを確認して、計測と標識装着を行いました。甲長107cm、甲幅79cm。いつも計測しているアカウミガメは甲長90cmを超えると大きく感じるので、最初に感じた大きさの違和感は間違いなかったのです。



穴埋め行動中の
アオウミガメと
中村さん

これまで、宮崎周辺でもたびたびアオウミガメが確認されていますが、いずれも未成熟個体です。特に死亡漂着するアオウミガメのほとんどが未成熟個体です。ただ過去には、2005年に日南市風田でアオウミガメの子ガメが孵化した事例や、2009年に宮崎市の明神山海岸と大炊田海岸でアオウミガメらしき足跡を確認した事例（わいるどらいふ16号）がありましたが、アオウミガメの成熟個体の上陸・産卵・帰海行動を個体と共に確認した事例は、宮崎県では初めてと思われます（日本ウミガメ協議会によると、本州、四国、九州で産卵する様子が確認された事例は報告されていないとのこと）。



次の日に再確認した産卵痕跡

地球温暖化に伴う海水温の上昇の影響で生息域が北上してきているのか、たまたま宮崎の海岸で産卵してしまったのか原因は不明ですが、海水温の上昇が原因であれば今後も上陸産卵する可能性があると考えられます。

岩切 康二

帰り道



山田 美波

雨が滴る6月の夜、山奥にある温泉からの帰り道に2種類の野生動物に出会った話をしようと思います。

この日私は動物に会えるかもしれないと辺りを注意深く見ながら運転していました。期待通り、山を下った先にある村を走行中、車を見つめる1頭の若い鹿が道の真ん中に現れました。車を止め、しばらく様子を見てみると、鹿はこちらに興味を持ったのかゆっくりと近づいてきました。すると突然踊るようにジャンプしながら前方へ走り、急ブレーキ、そしてこちらを見て戻ってくる、不思議な行動を見せてくれたのです。鹿に出会うことは珍しくありませんが、この行動を見たのは初めてで、まるで道案内をしているようでした。この後ついていくと、開けた場所に出て、鹿は暗闇に姿を消しました。

もう一度山道に入りしばらくすると、ノウサギが急に飛び出してきました。危うく轆かけましたが、ノウサギは振り返ることなく、猛スピードで道路を走っていきました。踊るようにジグザグに動き、少し止まっては山を見て走る、どこから山に入ろうか考えているようでした。すると途中で方向を変え、ノウサギは山に帰っていきました。私は初めて見た野生のノウサギだった為、とても感動したのを覚えています。

夕方や夜、仕事や遊びからの帰り道に是非外を観察してみてください。思わぬところで野生動物に会えるかもしれないですよ。

今回は、金川 弘哉 さんをお願いします。

ハイロゴケグモ最新情報

2020年

- 9/11 宮崎市内の民家で、特定外来種のハイロゴケグモが確認された。宮崎港や細島港、石崎工業団地などの調査対象地区以外では初めて。
- 9/12 上記民家に隣接する3軒で成体メス3確認。
- 9/17 中部港湾事務所、県自然環境課、市環境保全課と対策会議に参加。関係者への講話が決定。
- 10/2 宮崎港の事業所から依頼があり、確認したところ、成体15、卵のう50を確認・駆除。
- 10/6 宮崎港付近の公園や店舗を調査。設力がH20以降の新しい建屋に多く確認された。
- 10/7 宮崎港付近の大型駐車場を有する店舗を調査。成体5確認したが、風で飛ばされ駆除できず。
- 10/9 水産会館で講話、自治会長ら「初めて聞いた具体的な対策を願いたい」と要望があった。
- 10/16 講話を受け、複数の事業所から調査の希望が、成体20超、卵のう50超、子グモ多数処理。
- 10/19 宮崎市北部の県住に住む方から自然環境課へ写真付メールが、成体雌雄2、卵のう5確認。
- 10/26 宮崎市東部公園ベンチ下に居ると自然環境課に通報、近くの3つの公園の確認もしたところ、合計で成体メス10、卵のう9を確認・処理。
- 10/30 宮崎港の広い敷地を持つ事業所から「処分したが全部かどうか見て欲しい」とあったので、確認に行った。成体メス100超卵のう50超処理した。特殊な場所にいるのが確認できたが、それが300以上あるので、日を改めて自社で処理することになった。港湾にも連絡し、協力 **<目立つ卵のう>**を要請した。



※防除のポイントや発見の「こつ」等をまとめた。まず、消火栓や電源ボックスの中以外で、巣や卵のう、成体を見つけるポイントを以下にまとめた。

- ① 巣は低い位置にある（地上～高さ20cmに多い、サッシ窓枠下など雨に当たらない北側に多い）。
- ② 糸にからまれていない虫の死骸が落ちている。毒が強く、糸で巻く必要がないため。
- ③ オオヒメグモ、ユウレイグモなど他の在来のクモがいる所には生息しない。（古い建屋には、いない）
- ④ 未ふ化の卵のうをメスは守っている（成体がいる所には、未ふ化の卵のうがある、つぶして確認を）。
- ⑤ 地味な巣（糸を多く使わない）で、ハエトリグモのような巣（多くの糸で白く見える）ではない。
- ⑥ ポロ網はクロガケジグモであり、近くにハイロゴケグモがいる場合が多い。（同居していることも）
- ⑦ 一度駆除しても、いい条件の場所では、一ヶ月もするとどこからともなく現れる。
- ⑧ 天敵はハエトリグモ？ハイロゴケグモの子グモを食べるため、その卵のうのそばにいますわる。

串間 研之

動物記録

2020年

- 6/8 白浜にアオウミガメ(甲長:42.5cm)が死亡漂着。消化器内よりプラスチック片を検出。
- 6/10 門川町立西門川小中学校にアオバズクが飛来。23日には都城市立梅北小学校でも確認。
- 7/3 宮崎県教育委員会は、大分、熊本との3県合同で2018年~19年度に実施した、国の特別天然記念物ニホンカモシカに関する生息状況調査の結果、推定生息数を約200頭と発表した。
- 7/12 日向市の平岩の放棄水田で日本一小さいといわれるハッチョウトンボが飛び始めたことが報道された。
- 7/16 日向市の塩見川河口でアカテガニによる卵の放出が観察された。
- 7/17 県が特産化に取り組むシベリアチョウザメが大淀川下流の宮崎大橋付近で釣り上げられた。その後も複数捕獲され、話題となった。
- 7/23 青島にアオウミガメ(甲長:44.5cm)が死亡漂着。
- 8/19 宮崎県はマンゴーやピーマンなどの実を腐らせるミカンコミバエが串間市内で発見されたことを発表。
- 8/28 高鍋町堀の内海岸にカズハゴンドウ幼獣(体長:144cm)が生産座礁。地元サーファーらと救助を試みるも死亡。
- 9/7 野生ニホンザルが生息する幸島と陸続きとなりザルの移動が心配されていた「砂の道」が台風10号の影響で消失した。
- 9/10 宮崎昆虫調査研究会が県内で確認された昆虫類をまとめた「宮崎県昆虫目録2020」を発売。県内に生息する27目7,241種を掲載。
- 9/17 青島にアオウミガメ(甲長:44cm)が死亡漂着。腸内よりビニール片を検出。
- 9/20 串間市の都井岬で国の天然記念物の岬馬が季節外れとなる子馬が生まれた。出産時期は例年4、5月。

野生研のあしあと

2020年

- 7/1 宮崎土木事務所の依頼を受けて清武川北側の工事について相談対応。
- 7/12 西都原このはな館で、西都原の御陵墓で舞う、ヒメボタルについて、会員が講話を行った。

- 7/18 アカウミガメを調査している新富町の富田浜を航空自衛隊新田原基地隊員が清掃に汗を流した。
- 7/21 月例会を開催
ウミガメの中間報告
その他、RDBや外来種、ハイイログケモ
- 8/1 レッドデータブック(RDB)改定委員会の開催。宮崎県よりの委託に関して
- 8/18 月例会議開催
Zoom会議にて実施
ウミガメの中間報告
報道対応について
- 8/29 高鍋町堀の内海岸にカズハゴンドウ1頭が漂着。救助を試みたが、死亡。会員が調査救助に関わった。
- 9/13 MRT テレビにて、「アカウミガメのふるさと」で新富南海岸のアカウミガメ調査保全活動を紹介される。
- 9/15 月例会議開催
Zoom会議にて実施
ウミガメの中間報告
上陸数は1,000回を上回る
新富南海岸野生の動物対策、ネット設置試験の中間報告
- 10/20 月例会議開催
Zoom会議にて実施
アカウミガメの中間報告
コシジロヤマドリが生息情報を依頼
- 10/28,29 国の特別天然記念物ニホンカモシカの九州生息数が約200頭と推測された。そこで、熊本県、大分県、宮崎県の3県が集まり、生息数の調査方法や、場所、また保護について協議を行った。会員が参加した。

宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.50 2020年11月15日発行

特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)
代表 岩本 俊孝

<http://www.m-yaseiken.org>



ココメとコナツ

「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。